デカセギと家族(1)

―― 日本就労の意図せざる結果・A家の場合 ――

樋　口　直　人（徳島大学総合科学部）
稲　葉　奈々子（茨城大学人文学部）

1．問題の所在

国際移民がすぐれて家族に関わる営みであることは，これまでも繰り返し指摘されてきた。移民は，世帯の利得を最大化し，リスクを分散させるための戦略として，80年代以降の研究では位置づけられてきた（Massey 1990；Massey et al. 1998）。しかし，日本の移民研究で家族という単位に着目した研究はきわめて少ない[1]。その理由として，実態調査にもとづく移民研究の主な対象となってきたニューカマー外国人の多くが，家族単位で移民してきていない状況があるだろう。

しかし，いわゆる日系人の場合，基本的には家族の誰もが渡日可能な状況におかれている。事実，家族単位のデカセギは珍しくないし，家族成員が入れ替わって日本で就労するような状況もみられる。それに相応して，いくつか家族に着目した先行研究も存在しているが（江成 1995；イシカワ 1997），まだ知見が蓄積されたといいうる段階にはない。本稿を基点とする一連の報告で試みるのは，家族単位の移民の実態に関する理解の空白を埋めると共に，今後の本格的な分析に向けた素材を提供することである。

筆者らは，2005年よりアルゼンチンから日本へのデカセギの調査を続けており，本稿執筆時点で約180人のデカセギ経験者に対してインタビューを行ってきた。調査が完了した際には，全体のデータにもとづき亜日間の人の移動のダイナミズムを解明していくが，すでに一定のデータが得られているため，そのうちの一部を用いて質的な分析を試みたい。その一環として，家族を単位としたデカセギの過程と帰結を描き出していく。本稿はその第一弾で

あり，これに続く論考も含めて，個別の家族に焦点を当てて移民のダイナミズムを描くことを目標とする。

2．A家の構成

(1) A家の構成

まず，本稿で取り上げるA家の構成について確認しておきたい。主に登場するのは，図1の破線で示したロベルトとセツの夫婦である。ロベルトはアルゼンチン生まれの日系二世，セツは日本生まれの一世である。ロベルトは，後述のように小学校の数年間を日本で通った経験もあるため，読み書きも含め日本語は堪能である。セツは9歳で南米の他国に移民し，それからアルゼンチンに転住した。しかし，家では日本語をあまり使わないので忘れてしまい，簡単な会話以上には日本語はできない。そして2人とも日本で働き，2001年にアルゼンチンに戻ってきた。

2人とも父親は亡くなっているが，母親は健在でロベルトの母親はアルゼンチンでロベルト夫婦と同居している。セツの母親は，日本で息子2人（セツの兄）と同居している。ロベルトのキョウダイのうち，妹は結婚して南米の他国に住んでおり，アルゼンチンに住む弟はデカセギしていない。それに対して，セツの兄は3人とも日本におり，母親ともども日本に永住するつもりだという。

セツとロベルトの間には娘が2人いる。このうち長女は，後述のように日本には就学時に1年弱いただけで，生活基盤はアルゼンチンにある。非日系人と結婚し，働きながら大学に通っており，2007

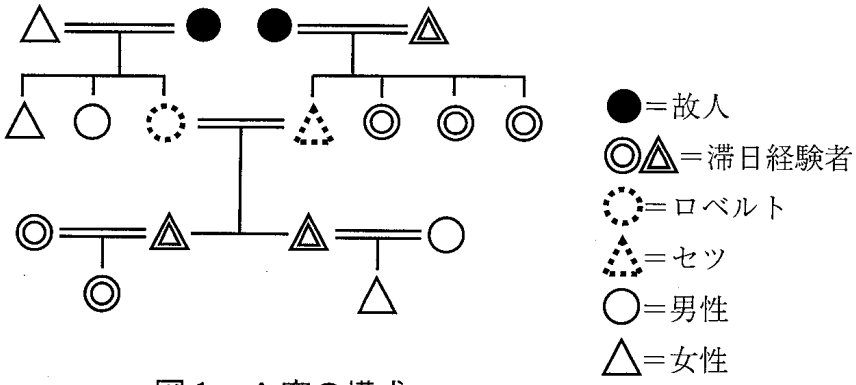

図1　A家の構成

年には子どもも出産している。次女は，中学を日本で通って卒業し，それから２回目の渡日を果たして就労し，そこで結婚した。子どもも日本で生まれ，現在は日本に住んでいる。

(2) 調査について

本稿で用いるデータは，筆者が2005年から行っているアルゼンチンからのデカセギの調査にもとづく[2]。アルゼンチンにあるＡ家については，2005年８月，12月，2006年８月，12月，2007年８月の計５回訪問し，ロベルト，セツ，ロベルトの母親，長女に聞き取りを行っている。日本での調査は，2006年９月に次女夫婦に，11月にはセツの兄にインタビューを行った。

3．ロベルトの日本デカセギ

ロベルトは二世だが，日本の親族に預けられて小学校１年から４年までは日本で通った。それからアルゼンチンに戻って高校を卒業した年には，父母の離婚問題が生じて日本に戻った母親を連れ戻すために，１年間日本で生活している。さらに，彼の家ではある日系新宗教を信仰しており，宗教関係でも86年に２週間程度の渡航をしたことがある。その意味で，二世とはいっても日本とのつながりがかなり保たれていたといえよう。

ロベルトはアルゼンチンで大学を卒業し，それから自ら事務所を持って建築士をしていた。弟の経営する会社が倒産した際，日本国籍を持つ妻の名義を用いてJICAから２万ドルの融資を受け，弟に融通したという。JICAの融資はドル建てで年利３～５％であり，当時は月利１割というのも普通であったのよりは随分と低利だった。ところが，ハイパーインフレだった1989年には，ペソが下落したためドル建ての融資を返済できなくなる。

セツの弟は，その前年から日本に行っており，アルゼンチンの月最低賃金である100ドル以上を，日本なら１日で稼げるという話をセツは聞いていた。日本に行けば１年で返済できる，日本に行ったことはあっても生活したことはないので住んでみるチャンスでもある，とロベルトは初めてデカセギに行

ったのである。

4．夫の不倫 —— セツと子どもたちが渡日したわけ

ロベルトは当初静岡県で昼間は派遣会社の通訳を，夜は工場作業をして働いていた。3ヵ月後に同じ派遣会社の神奈川県の工場に配置転換され，1年半働いてアルゼンチンに戻ってきた。このときには借金を完済できたという。そしてアルゼンチンに短期間滞在してから，ロベルトはもう1年働く，会社にもそう言ってきたと日本に戻っていった。

しかし，セツの耳に入っていたのはそれとは違う噂だった。曰く，ロベルトが日本で他の家族を持ってくらしている，と。実際，ロベルトは沖縄からペルーに渡った一世の女性と日本で付き合っており，アルゼンチンに一時帰国する90年9月の数ヶ月前にはその女性が妊娠していた。そしてロベルトが日本に戻ってから子どもが生まれ，しかしその女性とは別居していた。

そうした噂が流れるにつれ，自分が日本に行かないと夫は帰ってこないと思い，セツは92年12月に娘2人を伴ってロベルトのもとへと旅立ったのである。セツが着いてから，ロベルトは相手の女性との関係を清算するべく，何度も沖縄に足を運んでおり，苦労が多かったという。その当時，長女は15歳で次女は12歳。長女は私立の難関校に通っており，次女も難関校に合格したばかりだった。そうしたさなかにあった子どもを連れて渡日したところに，セツの思いが伝わってくる。

5．次女の再渡航まで

セツと子どもたちの日本滞在は，当初は3ヶ月でロベルトを連れ戻すまでの予定だった。しかし，結果的にセツもロベルトと日本で住むことになり，ロベルトもセツも工場で働いていた。長女は，日本の学校に行くのはいや，と1年滞在して少し働いて帰国した。7年ぶりに日本に遊びに来たロベルトの母が3ヶ月滞在し，アルゼンチンに戻るのに合わせてのことだった。それ

以降，95年に高校を卒業して大学に入るまでの３ヶ月間日本に遊びに来るが，基本的には祖母であるロベルトの母とアルゼンチンで暮らすこととなる。

次女は，アルゼンチンの高校（アルゼンチンの一貫制中学）には通わずに日本に来て公立中学に入学した。アルゼンチンの日本語学校でも１，２年は勉強したが，ひらがなが読めた程度で日本語は挨拶程度しかできなかった。そんな状態で中学校に入学し，２年先に来ていたアルゼンチン人が同級生で助けてくれたが，最初の頃は非常につらかった。２年目になって少し日本語がわかるようになったが，自分からは挨拶するくらいでそれ以上は話しかけられなかったという。

結局３年間日本の中学に通うが，高校に入るのは難しい。最初は日本で進学するつもりだったが，日本の高校でやっていくだけの自信がなかったという。姉もアルゼンチンに戻って来たほうがいいというし，祖母もいるし帰国することにした。95年に日本の中学を卒業してからは，セツと同じ会社で５ヶ月だけ働いて帰国し，アルゼンチンで高校に入り直した。それから２年で高校を卒業し，97年３月には歯科大学に入学するが，歯列の写真などが気持ち悪くて１ヶ月でやめてしまった。それからデザイン科の大学にも入りなおすが，11月には中退して日本の父母の元に再び行くことになる。

６．次女の結婚とロベルト夫婦の帰国

再び渡日した次女は，両親と同居しながら母親と同じ工場で働くようになった。ロベルトも，以前の職場で残業が減ったので，転職の機会を探していた。そうしたときに，妻の会社の花見に出た際にその会社の課長と親しくなったのがきっかけで，妻子と同じ工場で勤めるようになり，夜勤専門で働くようになった。

ロベルトは，当初は負債を返して１年半か２年で帰国するつもりだった。しかし，これまでみてきたような事情により，滞在が延びていった。日本での生活は忙しいとはいうものの，毎週日曜日にはボーリング場に集まって，

親しくなった日系人と遊ぶグループができていく。そこに家族で通っていたときに，次女はその中のペルー人の若者と付き合うようになる。

ロベルトたちは，失業もせず収入は多い方だったが，帰国後十分暮せるだけの貯蓄ができたわけではない。自動車は持たないようにしたが，自分たちでそれなりの家賃のマンションを借りていた[3]。セツもロベルトも働いていたが，月に600ドルはアルゼンチンの長女と母のために仕送りし，残るのは500ドル程度。これを貯蓄したが，10年間の滞在での貯蓄額は合計で５万ドルくらいだった。次女も，この頃は自分で稼いだ給料を使うのが楽しくて，全然貯金はしなかったという。

それでも，彼らは日本に残ろうと思ったことはない。滞日中，１年半に１回アルゼンチンに帰省したが，このときには２週間程度しか滞在しておらず，親戚に会うだけであった。それに対して日本では，Ｊリーグが生まれるのもみてきたし，このまま暮せと言われても全然問題ない。しかし，アルゼンチンで大学を出て仕事をやってきたし，日本では年金にも入っておらず生活保障もない。そうしたことを考えると，年を取る前に帰ったほうがいいと思うようになった。

それゆえ，2000年近くになるとアルゼンチンに帰国することを決めて，準備を進めるようになった。その１つとして，次女がペルー人の青年と付き合って１年になり，このまま結婚するのは確実にみえたので，自分たちが帰国する前に結婚するよう次女に促した。そして2000年11月に次女は結婚し，双方の家族だけ集まって近所の中華料理店でお祝いした。

そうして帰国の準備を整えているとき，ロベルトは日本の自宅からインターネットでClarin[4]を毎日みていたが，それだけでは実感がわかない。アルゼンチンがどうなっているかわからない。それで帰国の準備の第２段階として，2001年１月にロベルトはアルゼンチンに戻って故郷の状況を確認した。そして2001年内には完全に日本を引き払い，故郷の町にある家に帰った。帰国後は，お金はあってもどう使えばいいかわからず，１年くらい何もせずに過ごしていたが，長女の夫の父親が経営する会社に出資して共同経営することにした。その後，2006年には経営方針が合わずに会社をやめ，2007年現在

は自分で新規事業の準備をしている。

7．日本就労の意図せざる結果

結婚後の2002年，次女と夫はペルーとアルゼンチンの両親のもとで１ヶ月ずつ滞在している。それから2005年には妊娠・出産して９月には子どもとともにアルゼンチンに戻り，翌年６月には再び渡日した。日本で働いていた夫は，寂しくて妻（次女）がいなくなって２ヶ月後の2005年11月には仕事をやめ，妻と再渡日するまでアルゼンチンにいた。2006年には，ペルー人である夫の両親と姉も渡日し，６人で同居している。

セツの家族は，ほとんどが日本におり次兄は日本人と結婚して永住を決めている。母親と２人の兄は日本で同居しており，2004年に母親が目の手術をしたときにセツは半年渡日して３ヶ月だけ働いている。そして次女が妊娠した2005年にも，娘と孫のために８ヶ月間，次女の家に住んで働きながら世話をしていた。このような，アルゼンチンと日本にまたがる家族の生活は，今後しばらくは続くだろう。

ロベルトとセツの２人の娘たちは，毎日メールをやりとりするような仲の良い姉妹だが，長女は短期間しか日本に滞在していない。2007年時点ではまだ卒業していないものの，大学もずっとアルゼンチンで通い，あと数単位を残すのみとなっている。それに対して次女は，長女より３歳若かったこともあり，両親と一緒に暮らしたいという気持ちが強く，中学は日本，高校（アルゼンチンでは中学になるが）はアルゼンチンで卒業し，大学もすぐにやめて渡日してしまった。

こうした経験があるため，次女は自らの子どもには同じ道を歩ませたくないと思っている。日本に来て良かったのは，結婚して子どもができたことだが，アルゼンチンを離れたせいで大学に行けなかった。そのことを次女は後悔しており，子どもには苦労させたくないので，５歳になるときまでには，ペルーとアルゼンチンのどちらで住むか決めたい。次女は，両親がいるアルゼンチンに住みたいという。しかし，夫はペルーで大学に行っていないから

日本で暮したほうが仕事も確保できるし，ずっと日本にいたいという希望を持っている。

日本でペルー人と結婚することで，3つの国にまたがる家族が形成され，どの国で暮すのかについても意見の一致をみていない。別稿で紹介するB家の場合（稲葉・樋口 2008），登場する若い夫婦は子どもの小学校入学に合わせて実際に帰国を果たしている。しかし次女の場合，アルゼンチンで夫の就労先確保を含めた生計手段を立てるという現実的な課題の答えはみえていない。

次女の渡日や日本でのペルー人との結婚は，ロベルトが負債返済のためにデカセギにでなければ起こりえなかった。同時に，ロベルトが予定通り負債額だけ貯蓄して帰国すれば，セツが子どもを連れて渡日することもなかったはずである[5]。ロベルトのデカセギは，思わぬ形で家族全体のライフコースを変えていった。その最大の意図せざる結果が，次女の滞日と結婚であり，3カ国にまたがる生活圏なのである[6]。

【注】

1　国際結婚に関しては，日本でも一定の研究蓄積がある。しかし，ここでいう「移民と家族」とは家族単位の移民を指しており，女性の単身の移動が圧倒的に多い国際結婚は含めないものとする。

2　アルゼンチン調査は，2005年7～8月に予備調査を行い，同年12月～2006年1月，同年7～9月，12月，2007年7～9月に本調査を進めている。そこで得た知己をもとにして，日本側の調査を断続的に行っている。まだ調査中のためまとまった成果は発表していないが，予備的な報告として樋口（2005，2007）がある。

3　知人から，新車を買うのでこれまで乗っていた車をくれると言われたときにも，その後の維持費を考えて断ったという。

4　アルゼンチン最大の発行部数である日刊紙。

5　国際移民が留守家族に及ぼす影響については，さまざまな事例報告がある。ただし，これまで筆者らが調査した限りでは，デカセギが家族に大きな問題を引き起こした事例の聞き取りは相当の困難を伴った。そうしたことを話したくないのが人の常であるし，そうした人を避けて紹介される傾向が強いからであ

る。A家の場合，すでに家族関係が修復されて大分時間がたつだけに，詳しい聞き取りが可能になったといえる。

6　日本に滞在するアルゼンチン人は，ブラジル人やペルー人と比較してはるかに少ない。そして，これまで調査した限りでアルゼンチン人の社会関係はほとんどがデカセギ者の範囲内に限定されている。工場などで出会うデカセギ者のほとんどが，ブラジル人やペルー人であるため，アルゼンチン人が日本で相手と出会って結婚するケースのうち，かなりの割合で日系人同士の国際結婚がみられる。この点については，データが出揃ってから議論していきたい。

文献

江成幸，2005,「外国人労働者と家族 —— 日系ブラジル人・ペルー人の事例から」『名古屋短期大学研究紀要』33号.

樋口直人，2005,「アルゼンチンの日系クリーニング店とデカセギ」『Migrant's ネット』83号.

———，2007,「新宿駅西口の移住労働者」『Migrant's ネット』105号.

稲葉奈々子・樋口直人，2008,「デカセギと家族(2) —— 農園維持の世帯戦略・B家の場合」『茨城大学人文学部紀要（社会科学科論集）』45号.

コガ，エウニセ・A・イシカワ，1997,「国際労働力移動における家族関係の役割及び変容」『Sociology Today』8号.

Massey, D., 1990, "Social Structure, Household Strategies, and the Cumulative Causation of Migration," *Population Index*, 56 : 3 -26.

——— et al., 1998, *Worlds in Motion : Understanding International Migration at the End of the Millennium*, Oxford : Clarendon Press.

（付記）きわめて話しにくいことも含め，お話を聞かせてくださりデータの使用を許可してくださったA家の方々に深く感謝したい。本稿のもととなったデータは，科学研究費プロジェクト「経済危機と国際移民——アルゼンチン日系人のデカセギ戦略に関する研究」によっている。また，2006年度まで共同研究者だった丹野清人氏との調査によりデータは得られており，同氏にも感謝したい。